戦争物語

クロやんK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦争物語

【Ｎコード】
Ｎ８４６４Ｚ

【作者名】
クロやんＫ

【あらすじ】
戦争、、、それは死を生み出すもの
しかし戦争で得たものは大きい、科学は発達し、死の恐怖も思い知らされた。
もし人が死なない戦争があったら？
そして西暦３ＸＸＸ年、それは実在した。

登場人物

宮間（みやま）　真示（しんじ）
１５歳　三門高校１－Ｄ所属
今作の主人公
面倒くさがりやだが、頼まれたら断れない性格
典型的なお人好し

黒矢（くろや）　大輔（だいすけ）
１５歳　三門高校１－Ｄ所属　委員長（司令官）
主人公とは仲が良く、小学校の頃からの付き合い

山原（やまはら）　智華（ともか）
１５歳　三門高校１－Ｄ所属
性格が良くスタイルも良いのでモテる女子
小学校の頃から柔道をしていたので強い

三門（みかど）　優香（ゆうか）
１５歳　三門高校１－Ｂ所属　委員長（司令官）
三門高校だけでなく、様々な分野のものを取り仕切る三門グループのご令嬢権力で何でもできると思っている

真白（ましろ）　紗耶香（さやか）
１５歳　三門高校１－Ａ所属　委員長（司令官）
普段は大人しいが、戦争時になると冷静な判断で完璧な指令を飛ばす

本多（ほんだ）　勇斗（ゆうと）
１５歳　三門高校１－Ａ所属
三門の勇斗と言われるほどの実力を持つ

真白の右腕的存在で、１０人掛かりでもその暴走ぶりは止まらない

霧咲（きりさき）　望美（のぞみ）

１５歳　権帝高校１－Ａ所属　委員長（司令官）

三門高校と並ぶ名門高、権帝高校の生徒

プロローグ

戦争は多くの苦しみや悲しみを生み出した。
しかし、戦争で生み出されたものは全てマイナスの事だけじゃない。
人は死の恐怖を大いに理解した。
そして、科学も有り得ない速度で急速に発展した。
戦争から学ぶ事はとてつもなく大きい。
それを踏まえた上である時、ある科学者がある事を思いついた。

それは人が死なない戦争
それがあったなら、人間はさらなる事を学ぶ事ができるのではないか？
、、、
そして今それはある。

西暦３ＸＸＸ年
人類は第４次世界大戦を終え、科学は格段に進化していた。
そしてそれはあった。

「不死戦争」
科学の力で戦い、誰も死なない戦争。
それは日本で行われていた、より多くの事を学ぶ事ができる子供が多い都市で。

そう、この帝都ー日本都ーで

不死戦争（前書き）

どうも作者のクロやんＫです。
今回は未来の日本での物語です。
人が死なない戦争。
うーん、、、あったらしてみたいですねｗｗｗ

それと文といいストーリーといい下手ですが、下手でも下手なりに頑張るので、応援よろしくお願いします！

不死戦争

「お前達には、今日から戦争をしてもらう！」
ここ１－Ｄの担任の桧山が教卓に手を叩きつけながら言った。
「戦争？どういうことですか？」
そう言って桧山に聞き返したのは俺の小学校からの幼なじみの黒矢大輔だ。
「おぉ、黒矢と宮間は高校になってからこの都市に来たのだったな。」
ちなみに俺は宮間　真示。ここ帝都－日本都－に来て３日、そしてここ三門高校の生徒になっても３日という事だが、まさか、いきなり戦争をしろと言われるとは思っていなかった。
「はい、それはそうと戦争とは？」
「うむ、戦争とはズバリ〈不死戦争〉の事だ！」
そう言って桧山は何も無い空間を十字に指でなぞった。
すると、途端に何も無い空間から大きな光のディスプレイが現れた。
「まず不死戦争とは、文字通り人の死なない戦争の事だ。ここ帝都－日本都－は教育強化都市の一つで、人口１００万人の内、９０％の９０万人は学生の都市だ。そして教育強化都市ではこの〈不死戦争〉が教育義務科目となっている！」
ディスプレイの表示が変わる。
そこにはルールらしきものがびっしりと書かれていた。
「まずは基本ルールだ！〈不死戦争〉は最先端の科学により、人が死なないで戦争が可能になったものだ。〈不死戦争〉を提案した科学者はこう言った。」
「「戦争は悲しい。しかし戦争から悲しさを取り除けば、学ぶ事ができるのではないか？」とな。そしてそれが可能になった。」
「どう戦うのですか？」
黒矢が質問する。

「それは最先端の科学が可能にした能力で行ってもらう。」
「能力？」
「そうだ。能力は一人一人決まっている。能力は後ほど判定する。そして勝敗は体力、ゲームでいうＨＰだ。ＨＰは一人１０００ずつ持っている。それが０になると戦死扱いとなる。」
「あの～攻撃とかって当たると痛いんですか？」
女子の一人が聞く。
「それは大丈夫だ。なんせ最先端の技術が使われているからな。痛みは感じ無いし、あやまって校舎に当たっても傷一つつかない。この都市全体は防護バリアを張っているからな。」
これには真示もホットした。
「では、どうやって戦争を行うのですか？そしてどうやって勝敗がつくのですか？」
黒矢が言った。
「おお、黒矢良い質問だ。〈不死戦争〉開始するには開戦宣言を行わなければならない。行えるのはクラスに一人づつ居る司令官、つまり委員長だけだ。委員長は後ほど決定する。後は勝敗についてだが、勝敗は司令官が降伏宣言をするか、全滅するかだ。司令官が倒されても戦闘続行は可能だからな。」
「あとは、、、おぉ、そうだ。これは成績に十分関わってくるぞ。状況の判断力、分析力、行動力など総合して見ることができるんだから成績の５割はこの〈不死戦争〉にかかっているぞ。」
クラスのみんながうなだれる。
「それともう一つ、この都市全体には学区で区切られているが、学校の数は約２００ある。つまり、この都市だけで２００の高校の生徒がいるわけだが、、、能力を使っての喧嘩は立派に認められているから気をつけろよ。」
その瞬間女子からクレームの嵐だ。
「待て待て、喧嘩を〈路上不死戦争〉を申し込めるのは、防衛プログラムを切っている時だけだ。防衛プログラムを切にしたいやつは

切るが良い。」
「そのかわり負けたら向こうに戦利品がいく。戦利品は様々だが、一番多いのは教育強化都市で使われている電子マネーだろう。」
「でも、まぁ切らなければ良い話だからな。」
みんなが返事をする。
「よし、とりあえず〈不死戦争〉に関するルールはこのプリントデータに入っている。今からみんなに配布するから目を通しておくように。」
そういうと、みんなの腕の上の空間に小さい光のディスプレイが現れた。
そして右上に新着メールのマークが入っていた。
「よし、次の時間は保健室で能力を判定するからみんな遅刻せず来るように。」
そう言うと桧山は教室から出ていった。

こうして俺の戦争物語は始まった。

能力

「１－Ｄ男子はここに並べ！」
保健室は男子用と女子用があるようで、やはり教育に力を入れてる都市は違うなーと思っていた真示だったが、それは序の口だった。
「ここ本当に保健室なんですか？」
校舎から出ると体育館ほどの大きさの建物が２つ見えたので、あれも男子用と女子用と思っていたのだが、、、
「そうだぞ、保健室だ。教育強化都市だからな。設備が地方とは比べものにならんだろ？」
桧山が答える。
「比べものにならないも何も先生、、、ここはどこの病院ですか！？」
そう、まさに病院だった。
「はっはっは～、まぁ驚くのも無理ないか。ここ三門高校は特に教育に力をいれているからな～保健室でもこれくらいの大きさなんだよ。」
「じゃあ体育館は？」
「あれだ。」
桧山が指さす所を見ると、ドームがあった。
「あの～あれはドームじゃないんでしょうか？」
「何を言っているドーム型体育館だ。」
真示は確信した。
自分の常識はこの都市では通用しないと。
「さぁ、みんな入れ。」
保健室？に入るとドアが４つあった。
「出席番号順に４つのドアに並んでいけ。１は１のドアに、４は４のドアに、５は１の後ろに並べ。」
言われた通りに並ぶ。

「一人だいたい一分で終わるから後がつかえんようにスムーズに動け。」
そんなに早いのか！と思ったがこの設備ならありえそうと思ってしまった。
「よし次。能力判定を終えた者は体育館に集まるように。」
そしてあっという間にに真示の番が回ってきた。
「失礼しまーす。」
あいさつしつつ部屋に入ると、女の先生が座っていた。
「はい、出席番号と名前を言ってね～」
「あ、出席番号３１番の宮間　真示です。」
「はい、宮間君ね。じゃあ早速始めるね。」
そう言って横にあった大きな器具を寄せた。そこには頭にはめるための穴が空いていた。
「ここに頭を入れて。そして力を抜いてリラックス、大丈夫すぐ終わるわ。」
説明の通りに器具を頭にはめ、リラックスした。
「じゃあ説明するわね、人間はね元から特殊な力を持っているの。でも絶対普段通りに生活してるとその力は見ることはできないの。でもね、この器具から出される特殊な電磁波でそれを呼び覚ますことができるの。もちろん人それぞれ持ってる脳波が違うから能力も変わってくるわ。でもこの器具は様々な脳波に対応してくれるから大丈夫よ。分かった？」
真示は「はい」と返事をした。
「それじゃあ始めるわね。」
スイッチを押す音が聞こえる。
一瞬電気が流れてきたように感じた。
「、、、」
「はい、大丈夫よ。」
器具が取り外される。
「もう行って良いわよ。」

体が軽くなったように感じたが、それ以外は変わっていないように感じられた。
「終わったか、お前で最後だ、体育館に急げ。」
言われたとおりに体育館に向かうのだった。

ー体育館ー
さっきは遠目で見ていたので分からなかったが、実際に見てみると迫力が違うな～と思った。
そして、中に入ると下駄箱があり、1年～3年までの全員分の下駄箱＋体育館シューズが用意されていた。
それに履き替え、自分のクラスの列を探し、並んだ。
そして間もなく声が聞こえた。
「あ～あ～よしよし、みなさんこんにちわ！私はここ三門高校生徒会長の3年　坂上　雪穂です。」
マイクの音で、ザワザワが収まる。
「まずはご入学おめでとうございます。」
すると、いきなり窓が開いてない体育館に風が吹いた。
「なんだこれは、、、」
みんながまたザワザワする。
「は～い。注目！今のは私の能力で風を起こしました。みなさんもさっき能力を判定してもらったと思いますが、使い方が分からないですよね？」
たしかにそうだ。
「なので生徒会から入学祝いとして、マニュアルガイドが入ったデータを配布します。」
みんなディスプレイを表示させる。

すると右上に新着の文字がでていた。
「自分の能力の説明も各自配布されていると思います。この体育館には、トレーニングルームがありますのでそこで練習していただいても結構です。」
また右上に新着の文字が出る。
「生徒会からはもう一つ、能力は努力により研ぎ澄まされていきます。たくさん経験を積むほど強くなるという事です。努力は最大の力ですからね。」
もう一度風が吹いた。
「では頑張って下さいね。生徒会からは以上です。」
そう言うと壇上から降りた。
生徒会長の話の後は、校長の熱い努力の話を３０分ほど聞かされた。
その後ヘトヘトになって教室に帰ったのは言うまでも無かった。

変わり者

「何だこれ、、、」
教室に戻った真示はさっき配布されたマニュアルを読もうとしたのだが、そこにはこう書かれていた。

〔あなたの能力→判定不能　　〕
〔あなたの能力の特徴→判定不能〕
〔あなたの能力と似た能力→不明〕
そう、何故か判定不能と出ていた。
「大輔、お前何て書かれていたんだ？」
幼なじみの黒矢に聞く。
「俺は発火系能力だ、小さい爆発くらいなら起こせるみたいだ。しかし信じられないよ、こういうのって漫画とかの世界だけと思ってたよ。」
「そうだな。」
「お前は？何だったんだよ。」
当然聞き返してくる。
「いや、それがさ～判定不能って出てんだよな。」
「判定不能？どういう事だ。」
「分からねぇけど、桧山に後で聞くしか無いだろ。」
「そうか。」
そんな話をしていると、桧山が教室に入ってきた。
「よし、みんな能力はどうだったー？」
桧山が教卓に向かいながら聞く。
「まぁ、それはそうとして、、、明日から早速〈不死戦争〉が可能になる。そこで委員長を決定しなければならないが、、、実はもう決まっている。」
「どういうことですかー？」

クラスの男子が聞く。
「この学校での委員長を決める規則は、そのクラスに上がる前のテスト、つまりお前達の場合は入試だが、それの点数がクラスの中で一番高かった奴が委員長になる。」
教室内がざわつく。
「そして、このクラスの最高得点者は、、、５００点満点中３９８点の黒矢！お前だ。」
桧山が拍手をする。
「へ？お、俺ですか？」
当の本人は突然の宣告に驚いた様子だ。
「そうだ、これからお前が委員長、つまり司令官だ。このクラスはお前が中心となって〈不死戦争〉を行う。」
「俺が中心になって、、、ですか？」
「そうだ。胸を張れ、今日から一年間お前がこのクラスを引っ張るんだ！」
「は、はい！分かりました！！」
黒矢は突然の状況に圧倒されつつも、了承した。
「何か一言、抱負なんか言ったらどうだ？」
桧山が後押しする。
「え、え～と、、、この度このクラスの委員長になった黒矢　大輔です。みんなを精一杯引っ張って行きますので、よろしくお願いします！」
クラス中から拍手が鳴り響く。
「よし、良い心構えだ。クラスのために、がんばるように。そしてクラスのみんなも黒矢の事を支えてやるんだぞ！」
みんなが返事をする。
「よし、今日はこれで解散だ。放課後トレーニングルームに行って試しても良いぞ。では解散！」
桧山がそれを言い終えると、みんな各自各自帰る用意を始める。
すると、桧山が真示の側にきた。

「宮間、分かってると思うが、帰りにもう一度保健室に行ってくれ。」
「あ、はい。」
さっきの能力不明の事だろう。それしか理由が見あたらなかった。

ー保健室ー
「失礼しまーす、、、」
桧山に言われたとおり、真示は保健室に真っ直ぐ向かった。
あいさつしながら先ほどの部屋に入る。
「来たわね、まぁそこに座ってちょうだい。」
そう言って椅子を指差す。
真示はありがたく座らせてもらう。
「呼ばれた理由は分かっているわね？」
「えぇ、多分ですが、、、能力の事ですか？」
心当たりがあるので、正直に言った。
「そうよ、能力不明って出てたわよね？」
真示は頷いた。
案の定、的中した。まぁ、それしか理由が無いのだが。
「理由はもう分かっているの、本当に極希にいるのよ、、、普通の人とは大きく異なった脳波を持っている子がね。」
「俺がですか？」
「そう、あなたもよ。でも私が見たのはアナタが初めて。正直驚いているわ、、、大きく異なった脳波を持っている子は、日本では１０人、あなたを入れたら１１人しかいないのよ。」
真示には、先生の目が輝いているように見えた。
「それで、、、俺はどうすれば良いんでしょうか？」

「大丈夫、そりゃ大きく異なった脳波なんだから普通の機械じゃ出ないわよ。それ専用の機械があるの、それがコレよ。」
さっき使ったのと同じように見えたが、少し色が違うようだ。
「使い方はさっきと一緒だから心配しないでねー」
さっきの通り頭にはめる。
「はい、リラックスしてー」
「、、、」
３０秒くらい待つと、
「はい終わり。もう外して良いわよ。」
さっきよりも体が軽くなった。今度はちゃんと感じられる。
「えぇと、、、アナタの能力は、、、」
壁にディスプレイが表示され、何かを解析している。
「へぇ、、、やっぱり見たことも聞いたことも無い能力ね。」
そして真示の能力を告げる。
「アナタの能力は、＊＊＊よ。スゴいわね～特殊すぎるわよ。あ、マニュアル送っといたから。」
「あ、ありがとうございます。」
部屋から出て行こうとするが、呼び止められた。
「アナタもしかしたら、、、いや、何でも無いわ。さようなら。」
軽く一礼して部屋を出る。
とりあえず真っ直ぐ家に帰る事にした。
真示は本当なら、三門高校の寮に入るハズだったが、募集人数がそれを上回り、お人好しな真示はすぐに譲ってしまったのだ。なので、仕方なく三門高校から１ｋｍほど離れたマンションの一室を借りたのだった。
「とりあえず夕食のためにスーパーに寄らないと、、、」
事前に調べていた最寄りのスーパーで夕食の食材を買っていく、今夜のメニューは真示の大好物、母直伝の豚汁と特売の塩サバにした。
スーパーを出る頃には、当たりは暗くなり始めていた。
春になったとはいえ、夜になると寒さを感じる。

小走りでマンションに帰ると、自分の借りた部屋のドアに誰かいた。
「ん？なんでだ？俺が借りた部屋、、、だよな？」
鞄から手書きの紙切れを取り出す。
それには自分の部屋の号室と暗証番号が書かれていた。
間違い無い、あれは真示の部屋だった。
「あ、あの～スイマセン、、、そこ俺の部屋なんすけど、、、」
恐る恐る話しかけてみる。すると、、、
「え？そうなの！？」
女の声だった。良く見ると三門高校の制服を着ている。
「あれ？君ウチのクラスにいたよね？」
「え？俺は１－Ｄの宮間　真示なんだけど、、、」
「やっぱり！私も１－Ｄだよ。１－Ｄの山原　智華。」
「そうか。で？なんで俺の家の前に？」
「いや～今気づいたんだけど隣だったみたい。暗証番号合わないから焦ったよ。」
笑いながら答える。
「えぇっと、まぁ隣だからよろしくな。」
一応あいさつをしておく。
「うん、よろしく。じゃあね～」
そう言うと自分の部屋に戻っていった。
そしてその後、真示も自宅に入るのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8464z/

戦争物語

2011年12月31日01時47分発行